

大阪大学図書館報

Vol.28 No.2-3 Nov. 1994 (平成6年) 通巻115-6号

附属図書館本館の浸水特集号

- | | |
|----------------|-------------|
| ○9月7日の集中豪雨災害報告 | ○ODINS と図書館 |
| ○経過報告 | ○お知らせ |
| ○被災図書数と廃棄基準 | ○会議 |
| ○中田厚仁記念文庫設置 | ○日誌 |

9月7日の集中豪雨災害報告

9月7日の想像もできない災害から約2カ月半が経過した。今では書架の救済した被災図書とタイルの剥がれた床を除くと当時の災害の跡は見あたらぬほど復旧できた。これも職員はじめ関係者の協力のお陰と感謝している。

今回の災害については新聞などで記録は残るであろうが、図書館として館報に今回の災害に関する記録を残しておくことも意味あることと考え本号を災害特集として記録し残すことにした。もとより、このような災害は二度と起こってはならない事ではあるが、様々な教訓を残してくれたことも事実であり、その意味では図書館の歴史の断片と言うことで災害発生から復旧までの概略をとりまとめた。

今回の豪雨は北摂地区のそれも極めて限られた地域のもので、雨は9月6日の午後7時頃から降りだし、雷鳴を伴った激しい雨に変わったのは9時頃であった。雷雨前線がそのまま居座

り、雷雨に変わってから僅か5時間で床上1メートルに達し、午前2時30分を境にポンプも使用したが5時間で水が引くという短時間での異常な水害であった。

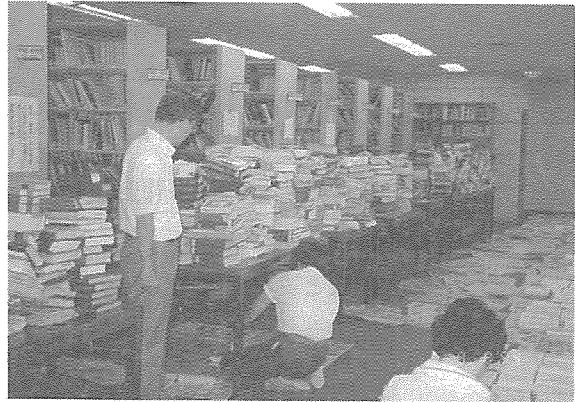
ある新聞の7日の夕刊では「大阪空港機能マヒ」「1時間で130ミリ」といった大見出しと、さらに「…大阪管区气象台によると大阪府豊中市では午前1時50分までの1時間で87ミリの雨量を記録…」と報道された。

1) 建物構造

図書館は昭和35年に独立した建物として完成し以後3度にわたって増築を行い現在に至っている。今回、床上1メートルという床上浸水に遭ったのは昭和47年の増築部分の地階822m²で、情報管理課の事務室及び機械室である。建物西側は道路から3メートル、南側は2メートルほど削り地下1階、地上2階になっている、

機械室は更に1メートル低くなっている、このような構造になったのは、この上に1階増築するという計画があったからである。この地域が空港の関係で高さ制限があるため、あえて1階分を掘り下げる必要があった。また、心臓部である事務室を地下に配置したのも将来の増築と

り膨れ、救われた帙は使い物にならなくなった。完全に復旧させるには黴及び黴の菌の除去と解体再製本などがあるが、資料によっては黴の防止にとどめ現状で保存するほうがいいものもある。いずれにしてもそれには大きな予算が必要であり今後の課題である。美術書は当然のこと



いう前提があったため、筆者も増築計画の際の一員であったが「水害」と言葉がでた記憶は全くない。大阪空港の例でもわかるように今回の豪雨が通常の排水能力をはるかにしのぐものであったということである。

2) 図書の被害と措置

図書館であってみれば当然と言えばそのとおりであるが、最も大きな被害は図書資料で約1万冊をこえた。復旧作業にあたっていかに図書を救うかということ考えた。和装本は殆どものが自然乾燥させることにより一応は使用可能な状態に復元できたが、体積が約30%ばか

新刊、古書を問わずアート紙のページのある図書は糊で接着したように張り付き、中には本に挟まれたアート紙の広告で前後のページがダメになるというの見受けられ廃棄せざるを得なかったものもある。図書の大きさによっても被害が異なっていた、小型の図書に比べ大型の図書は本の体をなさないほど形が崩れ、また自然乾燥させている間にもたちまち黴が発生し、仮に形態をとどめても自然乾燥の限界があった。装丁では布張りが台紙から剥がれた図書が多く見られた。素早く乾燥させ救済に努めたが、乾燥するうちに形がいびつになり、読むのには支障がなくても紙が波打ち複写も出来ず蔵書とし

てはどうかと思える図書が日を追って増加し廃棄図書約7千冊という被害に達した。いったん乾燥させた図書も更に日がたつにつれ変形、黴が発生した。

これらの被災図書の実態は、文部省等への災害報告の他、各講座等にも被害図書リストを配布し実態を報告すると共に救済した図書の使用できるかどうかの判断を依頼した。その結果、当初の7千冊を上回る被害となった。また、救済することになった図書も黴の殺菌及び製本等の措置を講ずべく準備を進めているところである。

3) OA 機器

パソコン、ワープロ、目録用端末機等は冠水し全滅した。パソコン本体は高いところにおいて、冠水は免れたが高温湿度の中に置かれていたため使用不能になった。電子機器がいかに湿度に敏感であるかということである。貴重なフロッピーディスクも専用ケースに納めていた職員の記録はおおむね助かったが、引き出しに納められていたものは殆どが破壊された。

4) 復旧作業

作業には約1カ月を要した。朝は掛長以上の職員によりその日の作業内容、目標、人員配置等の打ち合わせを行い、夕刻には作業の進捗状況を確認し翌日の作業予定を立てるといった毎日が約3週間続いた。その間には事務局との連絡、マスコミの取材などに追われたが、担当を決め連絡或いは報告等に齟齬の生じないよう配慮した。

5) 今後の対応

今回のような極めて異常な雨はないと思われるが、それに近い雨が来ないとは断言できない。当面前述のような構造上の問題を克服し図書館を水害から守るための今後の対応としては

①緊急連絡網等の確認

雨期、台風時のみならず、これからの火災の発生しやすい時期に備えて緊急連絡網の徹底と定期的な確認を行う。

②浸水防止対策

- ・雨水の流入する職員通用口等の箇所に土嚢を用意する、或いは土嚢に代わる物として古新聞を各所に用意する。

- ・建物周辺の排水溝を点検する、特に台風時には念入りを行う。

③浸水を想定した対応

- ・事務室の書架の最下段の棚は使用しない。

- ・再整理等の図書は不必要に事務室に置かない。

- ・整理済みの図書は速やかに書庫等に移す。

- ・OA 機器は安全な場所に移す。

④浸水した場合の措置

- ・速やかに図書を乾燥させ、冠水をしなかったOA 機器も湿度の高いところから疎開させる。

以上のことは、本学での対応策であるが、あえて他の大学等の参考になることと言えば、大雨の予想される時は、出入口などに古新聞を土嚢代わりに用意しておくのも極めて効果的な方法である。

6) 災害復旧

災害復旧費の要求のため、被害に遭った全ての図書及び備品のリストを作成し事務局を經由し文部省及び財務局に提出したところであるが、このあと書類上の審査が行われ、10月25日には経理部、施設部、図書館の立ち会いのもとに近畿財務局による実地調査が行われた。災害復旧費に関わる判断が下されることになっている。何れにしろこれほどの図書の災害はかつてないことであり、審査の結果を待っているところである。

最後に復旧作業の期間を通して毎日の緊張と重労働にも関わらず怪我人も病人も出なかったことは職員の気丈さに支えられたもので幸いというべきであろう。

文責 事務部長 松浦 正

北摂地区集中豪雨浸水災害経過

9月6日(火)午後7時頃から始まった北摂地区の雨は、午後9時過ぎ頃からは雷鳴とともに異常な集中豪雨となった。このため、前掲事務部長の報告にも述べられているように、豊中キャンパスの中でも特殊な立地環境にある図書館本館は、排水機能がマヒするとともに地階部分に急速な浸水が始まり、予想もしなかった被害に会うこととなった。

以下に6日の集中豪雨開始以後、1ヶ月の様子を中心として記録をもとに再現する。

9月6日(火)

21:30 ・雷鳴とともに集中豪雨が始まる。

9月7日(水)

01:30 ・警備員(文学部に常駐、図書館も警備)から情報管理課長(本館から東3キロの緑丘宿舎)へ豊中本館地階事務室に浸水している旨緊急電話。

・情報管理課長から事務部長、情報サービス課長及び医学情報課長に連絡。

01:45 ・部課長、豪雨雷鳴の中緑丘宿舎に集合し、部長の車で図書館へ向かう。

・途中、千里川の増水等により道路が寸断。

02:10 ・キャンパスへ到着。図書館及び生協の地階部分はプールと化していた。

・警備員の案内で、西口玄関より図書館に入る。

・ブレーカーが落ち、館内は非常灯も含め照明なし。(非常ベル鳴り続く)

・地階の事務室の様子を懐中電灯で確認。ほぼ1mの浸水。生協は2m。

・書庫は(あと3~4cm)浸水をまぬがれる。

・建物外側からのプール化状況撮影。事務室内部の浸水状況を水中に入り撮影。

・部長室、課長室も同様に浸水。一段高い館長室は10cm浸水。

・事務室電動書架、通常書架の3段目まで水没。その上の図書等冠水。

・ブックトラック上の図書も全て冠水。

・机、事務関係書類、事務用図書、電算端末、ワープロ、パソコン、複写機等のOA機器水没。木製書架、ソファ、冷蔵庫等は浮いて漂う。

・館長他各職員に電話連絡。(事務室の電話は水没。階上の情報サービス課の電話を使う)

・OSC(大阪サービス・センター)も警戒中。

・この間も雷雨が続き、増水のピークは2時30分頃。

03:00 ・雨が小止みとなり、間もなく止むが道路等からはなおも水の流入が続く。

・北消防署に電話連絡。

04:00 ・OSCの排水ポンプで排水開始。最初はホース1本。最終的に4本。

・自家用車等により、順次、職員が到着。施設部等関係部署課長等に連絡。

・手分けして地階事務室以外の書庫、閲覧室等、館内各所について水漏れ等の被害がないか確認。(1階及び2階で、新館と旧館のつなぎ目に水漏れ)

06:00 ・ポンプによる排水の効果表れ、ふくらはぎ程度まで減水。

07:00 ・足首までに減水。通用口、窓等を明け館内滞留水の排水を促す。

08:00 ・館内滞留水が自力では事務室から流出しないまでに減水。(数センチ)

・各職員が順次到着。モップ等により館内滞留水の排水作業を開始。

・両分館から順次職員が応援に駆けつけ、冠水物品の運び出し、清掃等の復旧作業。

・館長と電話で協議。9月10日(土)までの閉館を決定。

・被害を被った図書の写真撮影。

・電動書架、端末、ワープロ、複写機等の動作確認。(動かず)

・文部省学術情報課へ電話で報告。(16:00)

・旧館を除き、照明が回復。コンセント等動力関係の電源は回復せず。旧館部分は照明、エレベータ等すべての電源が復旧の見込みが立たず。

・マスコミ取材：赤旗新聞、朝日新聞

9月8日(木)

・全員で、終日復旧作業。冠水した受入、目録作業中図書、製本雑誌、事務用図書約1万冊と推定。自然乾燥へ。1階閲覧室等で広げる(5千冊程度)

・その他の冠水物品チェック。

・豊中地区各部局長、事務長に電話で緊急事態、閉館措置等を説明。(13:00)

・総長へ事態の経過及び被害状況を報告。(館長)(13:30)

9月9日(金)

・終日、復旧作業。他学部からも応援。

- 各部局長へ説明の文書を発送。豊中地区各教官にも書面配布。
 - 両副学長へ被害の状況、閉館措置等を報告。(館長)
 - 「災害報告書」、「国有財産異常報告書」提出
- 9月10日(土)
- 定員内職員全員及び非常勤職員数名が出勤。終日、復旧作業。
 - 救命可能な冠水図書については、なお陰干しへ。(会議室等で自然乾燥)
 - 定員内職員は後日代休の措置。非常勤職員には超過勤務手当。
- 9月11日(日)
- 室内乾燥、悪臭防止、書類整理のため出勤者数名。
- 9月12日(月)(以後、開館)
- 旧館部分停電が復旧しないため、一部閉鎖して開館。終日、復旧作業。
 - 事務局長に改めて被害詳細を報告した。(部長)
 - 事務局へ災害復旧費要求資料を提出。
 - マスコミ取材：大阪大学 POST、日経新聞、産経新聞
- 9月13日(火)
- 終日、復旧作業。
 - 文部省学術情報課へ出向き、報告した。(事務部長)
 - 局長、庶務部長視察。
 - マスコミ取材：日経新聞
- 9月14日(水)
- 終日、復旧作業、被害図書調査及びリスト作成を開始した。
 - マスコミ取材：読売新聞、毎日新聞、読売テレビ、共同通信
- 9月15日(木) 国民の祝日(敬老の日)。
- 室内乾燥、悪臭防止のため出勤者数名。電源復旧工事のため終日停電。
- 9月16日(金)
- 終日、被害図書リスト作成等の作業。
 - 旧館の照明、一部応急復旧。(玄関ロビー、カウンター、参考図書室等)
 - 書庫エレベータの電源が応急復旧した。
 - マスコミ取材：赤旗新聞
- 9月17日(土)
- 部課長以下、補佐、専門員、本館・分館掛長全員、掛員数名出勤。
 - 被害物品の選別、椅子洗い、事務室清掃。
 - 自然乾燥中図書を選別。救命可能なものは、なお、自然乾燥へ。
- 被害図書リスト作成作業。
 - 廃棄基準を作成し、この時点で廃棄と判断される図書の箱詰め。
- 9月18日(日)
- 室内乾燥、悪臭防止、書類整理等のため出勤者数名。
- 9月19日(月)～22日(木)
- 廃棄対象資料の備品番号チェック、箱詰め、椅子乾燥、倉庫整理等。
- 9月23日(金)(秋分の日)～25日(日)
- 室内乾燥、悪臭防止、書類整理等のため出勤者数名。
- 9月26日(月)
- 自然乾燥中図書の状態チェック。
 - 局長へその後の復旧状況を報告。(事務部長)
- 9月27日(火)
- 文部省学術情報課長、大学図書館係長が視察。(13:00)
- 9月28日(水)
- 廃棄対象図書の撮影。
 - 台風26号に備え、屋上排水溝等清掃。
 - 浸水災害復旧慰労会(生協 18:00)
 - マスコミ取材：阪大新聞会、阪大体育会、日経新聞
- 9月29日(水)
- 文部省官房会計課第2予算班主査が視察。
 - 館長、文部省へ出向き報告。
 - 水に濡れた文書等の整理作業。
 - 廃棄対象図書を積み出し。(業者委託)
 - 台風26号に備え、建物周囲の排水溝等清掃。
 - マスコミ取材：読売新聞、読売テレビ
- 9月30日(木)
- 冠水文書等整理
- 以上、9月末日までの経緯を記した。
これをもって後始末が終わったわけではない。
10月6日には図書館委員会を開き、状況を報告し今後の対応について協議した。関心は主として冠水した図書の補償がされるかどうかにあった。これに対し、大学、文部省を通じて大蔵省にいわゆる「災害復旧費」の申請をしていること、その他、文部省にも大学事務当局にも支援をお願いしていること等を説明した。
また、10月25日には大蔵省近畿財務局が被害状況を見て、申請を査定したが、その結果は未だ示されていない。図書が災害復旧費の対象になるかどうか問題。時期も未だ明確ではない。

図書の廃棄基準

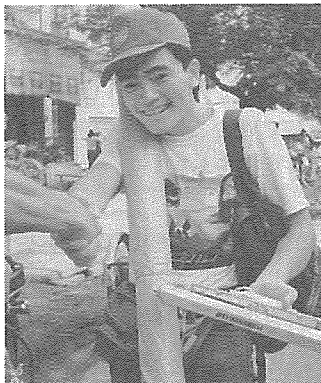
附属図書館では被害図書の乾燥等復旧に努めたが、多数の図書が使用不能の状態となり、次の基準にしたがって、被害報告、図書の廃棄等の処置を行った。

1. 原則として使用不能なので廃棄としたもの
 - (1) 表紙と中身が分離し、標題紙、目次等に欠落が生じて書物の形態をなさないもの
 - (2) ページとページが密着して、開くことができないもの
 - (3) 表紙に著しくカビが発生し、中身に及んでいるもの
 - (4) 表紙等が著しく変形し、中身の汚損が著しいもの
2. 原則として使用可能としたもの
 - (1) 陰干し等の結果、各ページが開くことができるもの
 - (2) 表紙にカビが発生したが、中身には及んでいないもの
3. 入手の可否・利用目的別の判断
 - (1) 新刊図書及び事務用図書で旧版の辞書類等で代替の新版が容易に入手できるものについては、原則として、表紙や中身が汚損（カビや泥など）・破損（破れ・変形）したのも使用不能図書とした。
 - (2) 古書等の今後入手困難と思われるものについては、再度乾燥させる、ページ毎に紙を挟む等により、使用可能とすべく努力した。

被災図書冊数

請求部局	廃棄図書冊数	救助図書冊数	被災図書合計冊数
図書館	3,893	1,377	5,270
文学部	1,276	1,224	2,500
法学部	420	156	576
経済学部	281	290	571
国際公共政策研究科	77	55	132

請求部局	廃棄図書冊数	救助図書冊数	被災図書合計冊数
全学共通教育機構	922	198	1,120
言語文化部	440	395	835
健康体育部	13	13	26
社会経済研究所	9	2	11
供用換（受）の図書	128	4	132
合計	7,459	3,714	11,173



中田厚仁記念文庫が設置されました

カンボジアで銃弾に倒れた中田厚仁氏を記念した同文庫が附属図書館本館に設置され、9月28日公開されました。国際ボランティア活動、平和維持活動、経済協力、人権・平和難民問題等をテーマとした図書約450冊が現在、収集されており、今後も引き続き補充します。

なお、この文庫の基金は中田厚仁氏の御両親、中田武仁氏夫妻が寄付されたものです。

ODINSと図書館

附属図書館

近年、大学内 LAN 等の各種ネットワーク及びネットワーク間を接続するいわゆるインターネットが急速に普及・拡大してきている。この全体として巨大なネットワークによって、電算機資源の共有や各種情報の送付／入手が（少なくとも技術的には）世界規模で可能となった。大学での研究・教育活動においてもネットワークを利用した学術情報流通の重要性は、分野による程度の差はあるにせよ、ますます高まると考えられる。本学においても待望の学内 LAN（大阪大学総合情報通信システム＝ODINS）が整備され、全学的に容易にネットワークへの接続ができる環境が整ったところである。

このような状況のもと、附属図書館としても ODINS を最大限に活用して大学の研究・教育活動を支援すべく、そのサービス内容や方法について検討してきた。以下にその検討の概要を紹介する。

I 目録情報の検索サービス（Online Public Access Catalog＝OPAC）

図書館の持つ最も重要な学術情報は学術図書・雑誌等の資料そのものであるが、これを利用するためには目録情報が不可欠である。この目録情報は、現在、図書館内に設置した専用端末や電話回線経由で接続したパソコン等によって検索できるが、これを ODINS 経由でも利用可能とする。

現行システムがネットワークに対応しにくい構造であることから、短期的には現行の電話回線経由で利用する検索システムと同様の機能でサービスを実現する。より使い易いシステムについては、近い将来に予定される次期図書館業務電算システムの導入によって実現したい。

OPAC については、今後次のような課題に取り組んでいく。

(1) サービス時間の拡大

現在、原則として図書館開館時間のみ利用可能であるが、ODINS が無休稼働であることなどを考慮し、OPAC も原則無休の（もしくはそれに近い）サービスとしたい。

(2) サービス内容の拡大

① 目録情報の遡及入力

現在の OPAC は、図書については一部例外を除いて昭和 62 年以降に処理した資料しか収録されておらず、それ以前のはカード目録しかない。従って、OPAC を検索して見つからない資料についても、最近の資料でなければ改めてカード目録を調べる必要があり極めて不便である。これを解消するために、現在データ未作成の資料についても遡って OPAC に収録する必要がある。緊急性は高いのであるが、多大な経費を要するため実現方法について検討している。

② 内容情報の充実

OPAC は、資料の標題・著者名など基本的事項しか収録しておらず、資料の内容に関しては分類・件名などが一部付与されている程度である。特に雑誌については雑誌単位の情報にとどまり、雑誌に掲載された論文レベルの情報は収録していない。これを改善し、少しでも資料の内容に関する情報を収録するようにしたい。

方法としては、既に存在するいわゆる 2 次情報データベース（論文レベルの情報を収録したデータベース）と OPAC の関係付け、OPAC への内容情報の付加等が考えられる。検索システムの大幅な変更、データ作成のための多大な経費負担が必要なため、早急な実現は困難であるが将来の課題である。

③ 新着資料検索機能

最近の一定期間内に受け入れた資料のみを対象にした検索ができるようにする。現在、方法

について検討している。

(3) ユーザインタフェースの改良

GUI (Graphical User Interface) を利用した使い易いシステムにする。次期システムにおける実現を計画している。

II 学術情報データベースの検索サービス

近年の学術情報生産量の急激な増加は、研究者が必要な情報を探し出す作業を過大なものとしている。学術情報データベースの電算機による検索はこの作業の軽減に極めて有効であるため、以前からオンライン情報検索サービスの形態で利用されてきたが、利用料金は利用者負担であり、また金額が利用量に比例するため利用頻度が高いデータベースでは高額となる。学術情報データベースを CD-ROM 等に収録して大学に個別に頒布して検索可能とする形態のサービスが数年前から出現し、我が国でも数多く導入されている。この形態では、これまでの例では利用者が利用料金を直接負担することがなく、価格も利用量に拘わらず一定である。現在本学図書館では、豊中本館で学術雑誌総合目録・判例マスター・CA 等を、生命科学分館で MEDLINE・Current Contents 等を、吹田分館で COMPENDEX-PLUS をサービスしている。しかし、いずれも ODINS に接続されておらずそれぞれの館内端末でのみ利用可能であるため、利用者は図書館へ出向く必要がある、端末が空いていない場合がある等の不便がある。また、データベースによっては図書館以外でも CD-ROM もしくは冊子体で別途購入しており、大学全体としてみれば重複購入となっている。

ところが、最近、CD-ROM 等で頒布したデータベースを学内 LAN 上で共同利用可能とするシステムが販売され始めた。これによれば、CD-ROM 装置設置場所に拘わらず利用者はどの LAN 接続端末からでもデータベースを利用できるため、利便性は著しく向上する。我が国でも既に幾つかの大学図書館で導入・サービ

スされており、利用頻度は高いようである。そこで本学においても、多数の利用が見込まれるデータベースについてはこのようなシステムを導入し、学内の学術情報データベース検索の利用環境を改善したいと考えている。

但し、このシステムは、システムの基盤となる機器 (ハードウェア) や検索ソフトウェアが高額であり、また、個々のデータベースの価格も相当高額である。従って、全てを図書館が負担して導入することは不可能であるため、全学的事業として経費の確保を行う必要がある。

III データベース (情報) の作成

現在図書館で作成している研究支援のためのデータベースは、OPAC のみであるが、更に利用者 (研究者) のニーズに応じてデータベースの作成・充実を行う。

- OPAC の内容拡大 (I (2) 参照)
- 特殊コレクションの解題/全文
- 学内研究者の研究テーマ
- その他

但し、データベース作成は通常多大の労力・経費がかかる作業であることから、具体化に当たっては、ニーズや他で既に作成された同種データベースとの関係、作業・経費のしかるべき分担などについて考慮しつつ進める必要がある。

IV 図書館利用支援・学術情報利用支援

図書館利用者に対して ODINS の機能を活用して様々な利用支援を行う。

- 電子掲示板を利用して、ニュース・ガイダンス等
- 電子メールを利用して、希望資料調査・参考質問/回答・投書箱等
- ネットワーク上で利用可能な学術情報やその利用のためのツール類の紹介、更にはいわゆるナビゲーションツール*の図書館での設定等

これらは、技術上の問題が比較的少ないと思われるので、業務上の問題 (ニーズ・学内での LAN 接続端末の普及度・業務量等) を検討し

た上で必要／可能なものから実現する。

*ナビゲーションツールとは、ネットワーク上にある数多くの情報検索サービスの中から利用者が求めるものを簡単な操作で探したり利用できるような仕組みで、これら自体もネットワーク上のサービスであり、gopher、WAIS、WWW などいくつかのツールが広く使われるようになってきた。

V 1次情報の電子配送

やや長期的取組みとなるが、目録情報や2次情報にとどまらず資料の内容そのもの(=1次情報)をODINS経由で配送することにより、研究者が研究室に居ながらにして必要な情報を入手することを可能にする。

次のようなものが考えられる。

- 冊子体資料のページイメージデータのFAXへの送信

複写請求のあったもののFAXによる配送、特定資料のイメージデータによるデータベース化・提供(劣化資料、地図、古文書等)等が考えられる。

- テキストデータ(全文)の送信
- 画像・音声等を含むデータの送信

但しこれらについては、技術的問題や知的所有権(著作権)上の問題、ニーズ等検討すべき事項がある。

VI ODINSへの接続点

図書館において、利用者持参のポータブル電算機をODINSに接続するための口を用意し、ODINS利用を可能にする。

以上がODINS開設に伴い考えられる新サービスについて図書館でこれまで検討した事項の概要である。図書館単独で実現可能なものもあるが、技術や経費、作業等の面から図書館だけでは実現が困難なものもかなりある。大阪大学における学術情報流通を研究・教育活動にとってより有効なものとするために、学内各組織や各人が何をしたいか/何をすべきかを考え、それを全学的に検討・調整することが必要と思われる。

■■■■■ お知らせ ■■■■■

OPACをODINS経由で利用できます

附属図書館では、本年9月より、本学図書館所蔵の図書雑誌の所在場所を検索する「図書雑誌所在情報検索システム」(OPAC)をODINS経由で利用できるようにしました。

接続方法は、

- ① telnet 133.1.91.21
- ② IDとPASSWORDをopac(小文字)でlogin
- ③ IDとGROUPNAMEをOPAC(大文字)でlogin
- ④ >>に対して単に送信です。

以下使い方は電話回線経由のサービスとほぼ同じです。終了は>>にENDと応えれば、自動的に接続まで切れます。

利用方法の詳細を説明したマニュアルを準備中です。

吹田分館の土曜開館始まる

本年10月から吹田分館は土曜日も開館しています。開館時間は正午より午後5時。サービス内容は書庫を除く館内閲覧。OPACも利用できます。なお、年末年始の休館日、祝日と重なる日は閉館となります。

オープンユニバーシティのビデオの貸出開始

本誌(vol.27, no.4)でお知らせした英国オープンユニバーシティのビデオが利用可能になりました。カタログはメインカウンター横にあります。ビデオテープは図書と同様に貸出できませんが貸出の更新はできません。利用の際はメインカウンターで申し込んでください。

■■■■■ 会 議 ■■■■■

分館長会議

6. 7. 28 (木) 9:32~11:10 (本館会議室)
1. 平成6年度予算配分案について審議した。
 2. 次期附属図書館長候補者の選考日程を審議した。

図書館委員会

6. 7. 29 (金) 10:03~11:20 (本館会議室)
1. 平成6年度予算配分案について審議し、原案どおり承認された。なお、平成7年度以降の学生関係図書購入費の配分を見直すことになった。
 2. 次期附属図書館長候補者の選考日程が原案どおり承認された。

吹田地区運営委員会

6. 8. 1 (月) 13:30~14:30 (吹田分館会議室)
1. 平成6年度学生用図書費執行計画案について審議し、原案どおり承認された。
 2. 新館備え付け工学部複写機の利用について審議し、原案どおり他の関連部局も利用できることが

承認された。

3. 指定図書制度について協議した結果、アンケート調査により実状を把握し、検討することになった。
4. 運営委員会規定6条の代理人の取り扱いについて審議し、原案どおり人事案件を除き、代理人に議決権を認める申し合わせが承認された。

生命科学分館運営委員会

6. 8. 3 (水) 10:30~11:30
(生命科学分館会議室)
1. 平成6年度製本費予算配分について、例年どおり、生命科学分館、薬学部、微研、蛋白研の受入雑誌数の比率に応じた予算配分案が了承された。

図書館委員会

6. 10. 6 (木) 10:07~11:20 (本館会議室)
1. 集中豪雨による被害状況についての経過報告があった。

■■■■■ 日 誌 ■■■■■

- | | | |
|-----------|--|---------------|
| 6. 7. 13 | 日本医学図書館協議会医学図書館研究会・継続教育コース | (広島大学) |
| 7. 22 | 学術情報センター総合目録委員会 | (学術情報センター) |
| 7. 28 | 分館長会議 | (本館) |
| 7. 29 | 図書館委員会 | (本館) |
| 8. 1 | 吹田地区運営委員会 | (吹田分館) |
| 8. 1~5 | 目録システム地域講習会 | (本館) |
| 8. 3 | 生命科学分館運営委員会 | (生命科学分館) |
| 8. 4~5 | 国公立大学図書館協議会研修会 | (大阪府立大学) |
| 8. 10 | 外国雑誌センター館会議 | (文部省) |
| 8. 24~25 | 医学図書館協会医学図書館員基礎研修会 | (生命科学分館) |
| 9. 7 | 集中豪雨により本館が浸水 | |
| 9. 7~10 | 水害による復旧作業のため本館を臨時閉館 | |
| 9. 28 | 中田厚仁記念文庫感謝状贈呈式 | (基礎工学部シグマホール) |
| 10. 3 | British Library of Political and Economic Sciences 館長 L. J. Brindley 女史来館 | (生命科学分館) |
| 10. 5 | 学術情報センター学術雑誌目次速報データベース入力説明会 | (基礎工学部シグマホール) |
| 10. 6 | 図書館委員会 | (本館) |
| 10. 14 | 近畿地区国公立大学図書館協議会講演会 | (京都大学) |
| 10. 19 | 国立七大学附属図書館部課長会議 | (北海道大学) |
| 10. 20 | 国立七大学附属図書館協議会 | (北海道大学) |
| 10. 26~27 | 国立大学図書館協議会文献複写に係る著作権問題特別委員会、国立大学図書館協議会賞授賞者選考委員会、図書館情報システム特別委員会、常務委員会、国立大学図書館協議会理事会 | (東北大学) |